

日本生育外国人児童の作文を書く力に関する計量的分析

—日本人児童との比較から—

工藤聖子 (文教大学)

中村夏帆 (東京学芸大学教職大学院院生)

1. 研究の背景と目的

国内の学校教育現場において、日本で生まれた、もしくは幼少期から日本で育っている外国人児童（以下、日本生育外国人児童）の増加が目立ち、新たな教育課題となっている。日本国内でも外国人児童の言語能力の調査が見られるが、中でも「書く力」についての必要性が注目される。

中島・佐野（2016）では、英語圏で収集した日・英の作文を、入国年齢と滞在年数によって短期・中期・長期の3つに分類しグループ別に分析を行っている。このうち長期では英語作文の質は全員が標準値を超えているのに対し、日本語作文は半数以上が標準以下であったとしている。また、単文使用率が高く、助詞の欠落、口語的接続語等の誤りの固定化が指摘されている。本研究では日本生育外国人児童（以下F）と日本人児童（以下J）の作文を、文構造の複雑さと話しことばの使用に着目して分析し、日本人児童とは異なる指導上の課題を把握することを目的とする。

2. 分析対象・分析方法

表1 分析対象作文数

	2年	3年	4年	5年	6年	合計	
F	23	26	34	27	29	139	
J	(A)	35	30	35	40	34	632
	(B)	89	90	82	95	102	

本研究は二つの小学校（A、B）の2年生～6年生が書いた出来事作文「全校遠足」（表1）を分析対象とした横断調査である。A校は外国人集住地域にあり50%強が外国人児童である。B校は広域から児童が通学し入学選抜がある小学校である。Fに関しては、日本生育外国人の作文のみを対象とした。その言語文化的背景は半数がベトナムで、その他、中国、カンボジア、ラオス、フィリピン、タイ、ブラジルである。A校からは2017年と2018年に、B校からは2017年に作文を収集した。作文数はFが1に対してJが5の割合となっている。

作文の産出量を見るために、一作文の文字数を、文構造の複雑さに関しては一文当たりの文節数（有効文節数÷文数）、複文割合（複文数÷文数）、一複文当たりの述語数を調べた。また、作文に使用するには不適切である話しことばを「子どもの作文話しことばチェッカー」¹で抽出した。さらに、その結果からFとJとの違いが表れる言語形式に着目し、詳細に分析した。

3. 結果

作文の量と文構造の複雑さについて、2・4・6年を表2に示す（紙幅の関係で3・5年は省略）。産出量は平均値を見ると3学年ともFが少ない。その変化はFもJも2～4年で大きく増加しているのに対し、4～6年では、Jがほぼ維持しているのに対しFは大きく減少している。Jの変化は国立国語研究所（1964）結果と同じであるが、Fに関しては日本生育外国人児童の傾向

¹ 科学研究費（課題番号：26284071,代表：齋藤ひろみ）の助成を受け、聖心女子大学の岩田一成氏が開発した作文内の話しことばを解析するツール。 <http://160.16.101.253/test/sakker/>

なのかこの集団の特徴なのかはさらなる調査が必要である。

文の複雑さの3項目の数値はいずれの学年もFはJより小さく、特に平均文節数ではFは6年でもJの2年を下回っている。学年による変化はFが2-4年間の増加が顕著であるのに対し、Jにも2-4年の変化は4-6年より大きい全体に緩やかな増加である。S.D.（標準偏差）では平均文節数の学年による違いが目立つ。Fは学年が上がるにつればらつきが広がるのに対し、Jは2年時点から大きく、4-6年で多少小さくなっている。Jは複文割合も複文述語数も同傾向がある。一方、Fの複文割合は学年の進行とともに減少し、ばらつきは縮小傾向にある。

作文中に一定数現れた話しことば形式に「～てる」「～けれど+～けど」「～みたい」「あんまり」「とつても」がある。その中の「～てる」と「けど+けれど」を表3に示す。2年で「～てる」はFの使用頻度が高く、「けれど/けど」はJの方が高かった。3年以降では、両形式ともFの使用頻度が高く、高学年になるにつれて減少傾向はあるものの、高学年になってもFは使用頻度が高い。この他の話し言葉について調べた結果は発表にて報告する。

4. 考察とまとめ

産出量、文構造の複雑化において、低学年段階でJより発達が遅れており、その後中学年まで急速に発達が進むが、高学年でもJの力までは届いていなかった。Jに比べFはばらつきが小さいことと合わせて考えると、Fの上位児童の発達速度が鈍化傾向にあると考えられる。一方、Jは高学年で縮小傾向にはあるが個人間の差が低学年から大きく、二校のデータを合わせて分析した結果として考察が必要である。話しことばの使用に関しては、FはJに比べ高学年になって残る傾向があった。日本生育外国人児童は日常会話を流暢に話すため日本語能力の課題が見えにくいだが、本研究の結果から、一定の産出量と文構造の力を獲得した後の指導の重要性や、話しことばと書きことばの使い分けに関して言語使用域を意識した指導が重要であることが確認された。

【付記】 本研究は、2014～2018年度科研費 基盤研究(B)研究課題番号 26284071「地域・家庭の言語環境と日本生育外国人児童のリテラシー発達に関する調査研究」（研究代表者：齋藤ひろみ）の一部として行われたものである。

【引用文献】 国立国語研究所（1964）「小学生の言語能力の発達」明治図書出版
 中島和子、佐野愛子（2016）「多言語環境で育つ年少者のバイリンガル作文力の分析—プレライティングと文章の校正を中心に—」、『日本語教育』164号,pp17-pp33

表2 FとJの作文の産出量と文の複雑さ

	有効文字数		平均文節数		複文割合		複文述語数	
	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
2F	168.52	90.59	4.54	1.58	0.51	0.24	2.36	0.91
2J	338.17	188.19	7.17	3.82	0.69	0.23	3.24	1.45
4F	459.76	162.61	6.19	1.65	0.68	0.20	3.07	0.73
4J	593.38	246.05	7.98	3.86	0.77	0.20	3.41	1.35
6F	271.41	137.75	6.69	2.23	0.74	0.20	3.36	1.14
6J	510.62	221.82	8.19	2.93	0.78	0.16	3.56	1.03

表3 「～てる」「～けれど+けど」話し言葉チェッカー分析結果

	てる/ (ている+てる)			けれど+けど/ (が+けれど+けど)		
	%	実数	全体数	%	実数	全体数
2F	33.3%	3	9	70.0%	7	10
2J	10.6%	23	218	80.0%	91	113
3F	23.1%	12	52	91.7%	22	24
3J	7.8%	34	433	72.0%	103	141
4F	18.0%	18	100	80.0%	36	45
4J	4.7%	23	483	71.0%	114	160
5F	12.9%	9	70	89.3%	25	28
5J	2.7%	19	682	47.0%	94	198
6F	11.3%	7	62	71.1%	27	38
6J	3.6%	21	575	37.0%	83	219